

新山協 ニュース

第11号 新潟県山岳協会

発行者 鈴木敏雄

弥彦松明登山

日本山岳会会員 山田一男

日本三大火祭の弥彦灯籠神事に、県山岳協会が永年協賛してきた弥彦松明登山祭も廿七回の多きを数え、やがてこれらの高頭祭をふくめた行事も、県山岳史の一頁にふさわしいものでないかと思えます。

あつたことが、神社の旧記や祝詞にもうかがうことができ、勅命により致雨の請願が再参ならずもありました。この山にまつわる山岳信仰と農事民俗には興味深いものが残っております。

早天が続いて農作物に支障をきたすと、蒲原領の農民達は蓑をつけ、七もり菅笠をかむり弥彦山に登り、ご廟所の前で先づ音頭取りが「弥彦山の竜と国上山の竜と、ご相談なされて雨々たのむ」と大声で唱え、一同がこれに和し懸命に祈るのである。貝をならし鐘をたたきながら、お塚の周りを手を振り足を踏みならし廻る、この間神職は声高らかに雨乞の祝詞を奏上する。

こうして、時によっては何日も祈願するので山頂に泊り込みの小屋を掛けて祈るうち、真赤に燃えた夏の太陽がは雨がポツリと降り出すと一同歎声を揚げながら、小屋を焼き払い、直ちに下山するのである。それが夜の下山ともなれば、それぞれ松明を持って下るが同時にこの動きをみて、麓で待っていた人達はこれまで、手に手に提灯を持って中腹まで出迎えに行くのである。この夜の山に連なる火竜の如き灯の行列は、下でみると燃えさかる灯はひときわ高く低く、うねるさまは実に美しいものであったと伝わっております。

いやひこのおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼふる

このような蒲原民俗に由来したものであり、明治廿二年頃までさかんに取行なわれておりました。

弥彦山と寺泊町との境には雨乞なる山名も現在残っております。これらの古い民俗行事を参考に当時の弥彦山岳会会長花井馨氏が考案され、始められたのが昭和廿九年の第一回松明登山であります。

山岳会のもろろん、地元弥彦山岳会の並々ならぬ努力によ

いやひこの神の麓に今日らもか鹿の伏すらむ皮衣きて角つきながら

弥彦さまの由緒は非常に古く有史以前に始り、越後開祖の神として、ことに農漁民の崇敬厚いものがあります。

霊峰弥彦が古来から全国的に晴雨の祈願に大きな存在が

松方三郎、三田幸夫、折井健一、山崎安治、金坂一郎、板倉勝正、坂倉登喜子、渡辺公平、浜野正男、樋熊清治、鈴木林治、森田行正、佐藤桂弥、齊藤平七の各氏でした。その他横有恒、日高信六郎、深田久弥、村井米子諸氏も来山されております。

に晴雨の祈願に大きな存在が

も祈願するので山頂に泊り込

一回松明登山であります。

山岳会のもろろん、地元弥彦山岳会の並々ならぬ努力によ

り、今日までの永い伝統行事
が守り続けられているのであ
ります。

第22回自然公園大会報告

自然保護委員長 笠原嘉明

八月六日午後三時、常陸宮
両殿下をお迎えして標記の大
会が開催されたことはニュー
スの報道で既にご存知の通り
である。二千数百名を集めた
この大会は夜の営火行事、翌
七日午後の閉会式と続き、参
加団体の県レク協会、県キャ
ンプ協会の手によって演出さ
れ、リハーサル通りに進めら
れた。

県山協としては各山岳団体
の参加一〇四名、地元子供会
二八名、役員三五名の計一六
七名の大部隊となり他の野外
活動隊を圧倒する参加人員と
なった。これだけの人数を受
け入れて流れにのせるための
事前の準備や当日の運営に県

た。

野外活動隊はそれぞれの計
画に沿って七日の午前に行動
を開始、我々は早朝五時に高
谷の池をめざして七班に分れ
(一一七名)、更に地元子供
会(二六名)、関東学生ハイ
キング連盟(九名)が加わっ
たパーティで出発した。意気
盛んなお年寄りや、県外から
の山岳関係者が集い、往きは
ゆっくりと根津さんの野鳥の
説明を聞きながら、かすかに
秋の気配を漂よわせる山道を
辿る。速く北アの積、穂高か
ら白馬岳まで歩を移すにつれ
て視野に飛びこんでくる。ヒ
ュッテ周辺や登山道には紙屑
一つなく地元の方々の日頃の
精進が感じられると共に、こ
のパーティの方々の気持の一
致もすがすがしく感じられて、
短い半日行程の旅でしたが
皆さんそれぞれに充実してお
帰りになられたのではないか
と思っ居ります。

最後にりましたが参加さ
れました皆様や運営に当られ
た各山岳会の方々、本當にご
苦労様でした。

第22回自然公園大会

に参加して

三条おいらく山岳会 樋口栄一

八月六、七の両日、上信越
高原国立公園内の妙高高原町
笹ヶ峰で本県で初めての第二
十二回自然公園大会が環境庁
と新潟県主催で盛大に開かれ
た。

この大会には、常陸宮ご夫
妻のほか、関係大臣、知事ら
約二千四百人が全国から参加
し、三条おいらく山岳会も登
山には常連のつわもの、男二
十人、女十人の計三十人が会
場を式典が行われた。約一千
人の来賓は全部正面、及び両
翼のテント内に居並び、まん
中には約千百人の野外活動隊
が各団体ごとに整列した。県
山岳協会の主力となった我が
おいらく山岳会の赤い制帽が
緑一色の環境にひときわ映え
て美しい。式は県警音楽隊や

中学生数笛隊の演奏のうちに、参加団体の紹介、宮殿下のお言葉、祝辞、功労者表彰など、型通り進んで、最後は地元郷土芸能の「須弥山（しゅみせん）太鼓」と「地雷也太鼓」が保存会によって勇壮に披露された。

夜になると営火行事が会場で行われ、笹ヶ峰キャンプ場で一夜を過ごす千人以上が大きな輪を作って見守る中、午後七時四十分、地元神社から採火した火が両殿下によって点火され、高さ十メートルの火の柱が炎々と夜空を焦がすと、全員の「燃えるよ燃えよ」の大合唱が高原にこだまして、交歓の夜を楽しんだ。

この山は野鳥の宝庫で雄大なイヌワシを始め、百種類以上の野鳥がおり、ウグイスなどのさえずりを聞きながらがらび、苦勞のしがいがあったと、

池に到着。標高二、〇九〇メートルだ。西には白雪をいただいた白馬岳をはじめとする日本アルプスの山々が遠い雲海の彼方にクッキリとその偉容を見せている。この自然のなせる雄大な大パノラマを見て、疲れはいっぺんに吹き飛ばし、苦勞のしがいがあったと、

午後零時四十分、全員が

のテントにもぐり込んで一杯やりながら、たった一枚の毛布にくるまって眠りに落ちていった。別のテントの若者たちの歌声を聴きながら。

さて、最終日の七日は、我々登山グループの総勢百四十人がまず真っ先に行動を起した。午前四時半起床、顔を洗うひまもなく、支度を整えて七班に分かれて午前五時十分にはキャンプを出発。朝もやの漂う山道を標高二、〇九〇メートルの高谷の池を目ざして登った。おいらくが参加したため、ジントクス通りきゅうもまたよい天気だ。

「別れの集い」に参集、「また和歌山（来年の開催地）で会いましょう」を合言葉に、拍手し、歌を歌い、互いに腕を組み、握手をしながら解散した。

往復十四キロの行程を七時間で踏破する計画なので、いつものおいらくペースというわけにはゆかない。第二班の我が隊が先頭に出ては一行のブレーキになる恐れがあるの

この付近はミズバショウ、チングルマ、ツガザクラ、コケモモ、コバイケソウなどの高山植物の群落が見ごとだ。更に幸運にも、南の方向に霊峰富士山が遙かに遠く雲の上に浮かんでいるのが見えた。

予定の時刻に帰着して、おいちである。我々は十一時五十分という帰着にタイムリミットがあるので、ほとんど休憩なしにがんばり続け、ついに

合唱は「おお牧場はみどり」「きょうの日はさようなら」「一日の終り」と続いた。

これが終わると、それぞれ十二曲上部の難所に挑んだが、前九時、ついに目的地、高谷

早くも同じコースを下山にかかる。下りもまた、苦難の連続である。こんな急坂を親に連れられた三歳の坊やと、川

これが終わると、それぞれ十二曲上部の難所に挑んだが、前九時、ついに目的地、高谷

早くも同じコースを下山にかかる。下りもまた、苦難の連続である。こんな急坂を親に連れられた三歳の坊やと、川

早くも同じコースを下山にかかる。下りもまた、苦難の連続である。こんな急坂を親に連れられた三歳の坊やと、川

これが終わると、それぞれ十二曲上部の難所に挑んだが、前九時、ついに目的地、高谷

早くも同じコースを下山にかかる。下りもまた、苦難の連続である。こんな急坂を親に連れられた三歳の坊やと、川

早くも同じコースを下山にかかる。下りもまた、苦難の連続である。こんな急坂を親に連れられた三歳の坊やと、川

をぶらさげて全員無事、午後五時四十分、東三条駅に到着、望月力リーダーに大変お世話帰宅した。

北信越国体報告書

少年女子監督 浜 田 亮 一

五月の二王子での県予選に、今年から北信越ブロック予少年女子の出場チームがなく、選は全競技をまとめたミニ団体とかチームを出して欲しいとの要望を受けた高体連では、八月下旬に会場は富山で、山岳競技は一昨年と同じ立山々から選出することになった。麓、大山町の常願寺川河岸段を推しても出場の意志がなく、地である。近年、観光開発が難渋した末に三条東高二名と新潟中央高一名の二年生チームを編成したのが六月中旬であった。

もかかった。補欠選手を含めたチームワークも出来、県予選に不参加の選手に、国体の山岳競技とは如何なるものかのイメージ作りも試みた。万全の準備とは言い難いが計画書作成、テント立て練習、ミーティングを八月下旬に行い大会に臨んだ。

八月二十九日、大会初日である。富山は隣県であっても遠い所だ。朝、家を出て観光客で混雑した立山駅に降りたのは二時すぎだった。地元役員の好意で車に分乗して会場の山野スポーツセンターに向う。既に各県選手団は到着しており、県山協役員の方々の迎えを受ける。

堅苦しい空気の流れる中で三時から開始式。選手は緊張していた。形通りの式が終り、泣きそうを空から小雨が落ちて来た。センター前のサッカーグラウンド脇に幕営する。六時から監督会議。競技方法と注意事項の説明があり、明日からの競技出発順の抽選が行われた。七時半すぎからキャンプファイヤーが催されるが、出場権のかかっている大会のせいか余り盛り上がらない。雨は夕方から止んだ。三十日、二日目。四時に起床、夜半の雨がふき込んでテント半分濡れる。朝食を済ませザックを一人11kgにバックして集合。小雨が降る中、六時より踏査競技開始。オープンの成年男子の後、成年女子、少年女子、男子の順に各チーム10分間隔に出発する。

6時50分、新潟少女がスタート。センター脇で地形図にコースを写し取る。コースは想定していたものとは異なり、会場から西に向い極楽坂スキ一場から新しく開かれた林道を通り亀谷までの約8kmである。

ジャンプ台の階段登りは相当にこたえたらしい。林道は曲折が多くガスって目標物も見えず、現在地確認が難しかったとのこと。

監督は足止めされ八時半すぎゴール地点にバス輸送。九時すぎに選手はゴールイン。時間はまあ良かったが、ポイント、コース確認がどうかと不安も残る。地元富山の少女は抜群のタイムであった。設問も読図力があれば基本的なものが多かった。

昼から午後にかけて千寿ヶ原の文部省登山研修所で昼食と館内見学、救助法の映画を観る。

会場に戻り三時よりテント設営の採点。軟弱なグラウンドに場所を移し、「始め」から3分間で立てるのである。

一生懸命にやったが要領のいい他県はフライまで一応張ってあった。フライを張れない新潟少女はガックリ。兎角立てれば良いのだ。全部ピンをくい、横の張り綱の数を少なくしても……。

新潟県三チームは真面目というか、基本に忠実というか

全部張り終えなかった。得点
競技化したから致し方ないが、
早立式テントの要領を研究す
る必要がある。でも何か虚
しい気持となった。

四時より天気図作成、その
間にセンター裏の砂利の所に
幕営し夕食の準備をする。

夕刻、踏査の結果が張り出
される。新潟少女は五位、残
念だ、やはりコースとポイ
ントの確認が不十分で大幅に

減点され、設問も三分の一の
出来だった。選手もショック
を受けたが縦走は頑張ろうと
明日の準備をする。

食後、成女のテントに選手
全員が集まってミーティング
をする。今日の成績が気にな
るが他の話題に花がさく。踏

査一位の少年男子諸君に期待
しよう。夜半すぎの豪雨に眠
が覚める。

三十一日、三日目。今日も
又、雨だ。朝食のチマキが酢
っぱくなつたと言って食べて

いる。元氣な選手には当たる

とは思えない。五時半にセン
ター前に集合。計量もパス。
六時、縦走競技開始。少年
女子から一分間隔で出発。6
時4分に昨日の成績を挽回し

ようと張切ってスタートした。
会場から東に向い栗栗野から
大品山に登り稜線をゴンドラ

山頂駅まで歩く約10kmのコ
ースで、制限時間は三時間四十
五分である。

時折強く降る生憎の空模様
となり、濡れながら滑る道を
登る選手が案じられる。監督

はセンターで待機、少年男子
の高橋先生は成績が気になっ
て落ちつかない。

選手は九時に大品山頂上に
着き、滑べる階段の道を急ぎ
時間内にゴールする。計量後、

地図の雨対策、避難路、水場
の有無、磁石使用法と現在地
の確認の質問を受け、バック

ングと医療品を点検された。
今日は全員、体調もよく、15
kg余のザックも軽く快調に歩

き通した。

下山後、午後まで自由行動
となり、入浴、更衣をしてセ
ンターの一室に選手、監督全
員集まり二日間の競技の感想
や反省を話し合った。

午後の一時半に閉会式。頑
張った縦走は三位であったが、
総合は五位と振わなかった。

長い三日間も終った。精神的
にも疲れて夕方の特急で帰途
についた。

長岡ハイキングクラブ 春 日 義 人

雨飾山親睦登山会の報告

長岡ハイキングクラブ 春 日 義 人

北信越国体結果報告

成年女子	縦走	二位	平田研究所長の測温によ ると七度と出た。たしかに日
少年男子	踏査	四位	本一冷い湧き水との事である。
少年女子	縦走	四位	神難新沢の釣橋を渡ると対岸 に梶山新湯の雨飾山荘に到着。
少年男子	踏査	一位	先着組に迎えられ山荘に入る。
少年女子	縦走	三位	明治初年の建物で、太い樫や 枅を現わした棟木は立派であ
少年男子	踏査	四位	り、室堂の建物にもおとらん 偉容である。受付を済せ、入
少年女子	縦走	三位	浴から帰るともう二階の大広 間で大親睦会が催されている。
少年男子	踏査	五位	地元の榎かまぼこは珍味であ り、次々と自己紹介、近況な
少年女子	縦走	五位	どが披露される。関川、新発 田、村松、亀田、新潟、長岡、
少年男子	踏査	五位	湯之谷、柿崎、高田、糸魚川 と全県から四十余人の参加で
少年女子	縦走	五位	深夜のエビキ迄延々と余興が つづく。

長雨、冷夏と今年は快適な
登山日和に恵まれなかった。
九月十四日、十五日の親睦登
山を上越地区が担当と決り、
準備を進めたがさすがに不安
な日々であった。幸い当日は
絶好の秋日和に恵れ、文字通
り親睦大登山会を無事終了出
来ましたことを御報告します。
岩峰が荒々しく眺められる。
九月十四日、思い思いに根
途中に日本一うまい清水があ

知川を辿り、梶山駐車場に向
う。駐車場は車であふれんば
かりの盛況で、とーろっこの
会員が整理に汗を流す。梶山
新湯へは比処から一時間余り
の山道を辿る。杉の植林され
た山道は良く刈払われ北面に
は駒ヶ岳、鬼ヶ面山、鋸山の
早朝わざわざ下の部落から運
んでくれた品物で、一同感謝
感謝で載く、樫、枅の原生林
の急坂を一登りすると支稜に

出る。杉の点在する尾根は、良く刈払われ一歩一歩と高度を稼ぐ。中の池に到着。大休止の上30分余りの急登で笹平に着く。眼前の月の世界を思わせるような、焼山の山容が現れ一同歓喜する。お花畑を三々五々山頂へ向う。四時間余りで全員頂上到着。五十嵐篤

協会・行事・活動報告

- 理事会 六月十一日 二十二名参加
- 新潟市井口宅 十九名参加
- 自然公園大会連絡会 六月二八日
- 新潟市今朝白在六月十三日
- 室賀 永高参加
- 国体選手集結打合せ会 六月二四日
- 新潟市市民館二四名参加
- 日山協理事会 六月二五日 東京
- 鈴木理事長出席
- 第二十二回自然公園大会打合せ 六月二八日
- 直江津スポーツハウス
- 弥彦松明登山打合せ 六月二八日
- 新潟田地区連対講習会 六月二八日
- 室賀協会長出席 六月二八日
- 自然公園大会参加者最終点検 七月三日
- 長岡市室賀宅 四名出席
- 国体合宿 富山県 七月十一日
- 北信越国体打合せ会 七月十三日
- 富山市

- 藤井国体委員長 杉本参加
- 岩登り講習会 御神楽岳 七月十九日
- 自然公園大会リハーサル 七月二四日
- 妙高高原町、笠原池田参加
- 弥彦松明登山 別記
- 第二十二回自然公園大会 別記
- 親睦登山(雨飾山) 別記
- 日山協国体委員会八月十日 藤島玄氏の「越後の山旅」
- 東京 藤井国体委員長参加 (上・下二巻) はまことに時宜を得た快著であり、登山界を裨益するところ大きいであろう。
- 国体合宿 八月十五日
- 富山県 十六名参加
- 第一回北信越国体 別記
- 理事会 九月十四日
- 糸魚川市梶山温泉
- 新潟に生まれ新潟に育った玄さん。日本海の砂丘に発達した新潟市は、越後の国境を囲む山々を見はるかす絶好の位置にある。玄さんは小学生の時、新潟から見える限りの山々を登り尽くす念願を立てた、という。それから半世紀、玄さんは宿願を見事に達成したのである。玄さんは本書の序で言っている。「私ほど寝食、苦楽を共にした良き山の仲間には恵まれた者も稀であろう。そうでもなかったら、山への情熱も続かず、どんな方向へ脱線していったかも判らない。山と雪の自然境と、豊かな知己を持ったのが、何よりの誇りであり、慰めであり、励ましであった」と。

藤島 玄 著

「越後の山旅」(上・下)について

久保田 全

わが国に近代登山が誕生し、山に言及した優れた案内書も、から七十余年。登山人口の刊行されていた。しかし、この激増に伴って多くの登山案内書が世に送られてきた。西頸城郡役所「日本アルプス蓮華」を総体的にとらえたものでは「岳登山案内」(大6)、新潟「山山林会」「銀山平と尾瀬沼」(大14)、平野秀吉「日本アルプス登山案内記」(昭4)、は刻々と変貌を続けている。角田吉夫「上越国境」(昭6)、新潟県の山もまた例外ではない。日本登高会「上越の山」(昭12)等、すでに戦前、本界のもの求められるのである。三十五年度版「越後の山旅」

下越、中越、上越三部作を全面的に改稿して上下二巻とし、上巻では朝日、飯豊連峰、五頭山塊、佐渡の山々に重点を置き、下巻には、上、中越の山々を収めたものである。

本書編集上の特色は三つある。一つは、その山の登山記録に基づいて案内すること、第二は、山の先人が山をどう見ていたかを知るために、古文書を多量に収載したこと、第三は、女子も加えた一般登山者を対象にし、夏山における一般ルートを中心にして岩登りと沢の溯行を極力抑えたこと、である。雪形、伝説、熊狩りなど山の民俗も本書を特色づけるものである。見る案内書より読む案内書を心がけ、写真より地図に重きを置いたことにも著者の登山観がうかがわれる。

収録の文献資料は、「越後名寄」「新編会津風土記」「越後野志」「北越雪譜」「日本山嶽志」「山岳」「登山」

れる。

高行」等十数編。本書は単にコースタイムを列記しただけの無味乾燥なガイドブックとは全く性格を異にする。生命感にあふれたユニークな山の地誌である。

さて、上下巻ともその構成は、地域概念図、越後の山の気象、地質、植物、高山植物目録、動物をまず述べ、次いで山岳各論に及ぶ。上巻(昭51)所収の主な山々は次のとおり。朝日山塊、光鬼山、飯豊山塊、鷲ガ巣山、焼峰山、二王子岳、御神楽岳、粟ガ岳、五頭山塊、菅名山塊、光明山、弥彦山、角田山、佐渡の山。

信越の名峰苗場山を見よう。ここでの文献は、「新編会津風土記」「北越雑記」「越後野志」「越後薬泉」「北越雪譜」「温古の栞」「南魚沼郡誌」「中魚沼郡誌」「信濃奇勝録」「日本風景論」「地名辞書」大平辰寿像銘文、松本喜之七、酒井由郎顕彰碑文、の多数に及ぶ。案内紀行では、大資本の進出による自然破壊をいきどおり、山頂からの富士山遠望の可否については、武田久吉、川崎隆章、大平辰各氏の諸説が紹介される。

本書の記述が極めて正確、行間に豊かな人間性があふれているのは、著者半世紀にわたる実地踏査の裏づけがあるからだ。豪雪と密叢の越後の山を探る時、本書は真によい指図書となるだろう。先人高頭仁兵衛「日本山嶽志」の実践編と言ってよいかも知れない。

け加えた上巻改訂版が出た。人々さん五十年の山旅の集大成であり、越後の山の最良の指目標である。

夏山登山はいかがでしたか。人部としては、意義ある行事を計画しましたので、男女を問わずぜひ多数のご参加をいただきますようご案内いたします。

本年度の目的は、次のとおり

また、これから秋山に、冬山にとすばらしい計画が夢を催しますので、何卒計画の一端に加えていただきたくお願ひ申し上げます。

昨年も婦人部の行事には、ご協力いただき、また、事故に際しては、多大なるご迷惑をおかけいたしました。負傷者は、元気に働き、山への意欲を燃やしております。今年もそれに負けずに、

踏査登山のご案内

婦人対策部

目的

踏査登山(山のオリエンテーリング)

地図を使用して、距離の出

し方、高度差、三角点の種

類など

日 時 十一月十五・十

六日(第三土・日)

集合時間 十五日十六時

集合場所 五頭連峰少年自

然の家(笹神村畑江)

参加費 一人二、〇〇〇円

(施設使用料を含む)

持物

食料 三食(夜・朝・昼)

装備 日帰装備と寝袋

踏查資料 地図 五万津川

二万五千出湯、定規、コ

ンパス、磁石、筆記用具

申込〆切日 十一月五日

踏查コース 五頭連峰の一

部(詳細は当日発表)

予定タイム

十一月十五日

16時10分 開会式

司会 新潟県山岳協会

16時15分

踏查について 平田大六

山と私

長岡ハイキングクラブ

金内幸子

越稜山岳会 山田智子

越後ハイキングクラブ

会場 阿蘇国立公園 くじ

18時 懇親会

十一月十六日

5時 起床

6時 出発

踏查をしながら実距離

の計算と現在地の出し

15時 閉会式

解散

連絡申込先

加藤記代子

〒九五〇二二

新潟市浦山二丁目八一六

電話〇二五二一六五―四四九五

(自宅)

電話〇二五二一四一―六六三二

(会社)

第二十一回

全日本登山

体育大会案内

期 日

昭和五十六年六月四

日(木)〜七日(日)

三泊四日

会 場 阿蘇国立公園 くじ

う山系

主テーマ 自然保護

コース 長者原ノ坊がツルノ

大船山ノ中岳ノ久佳山など

三コース予定

詳細問合せは協会事務局迄

「日山協」

参与(賛助会員)

の推薦について

日山協では各都道府県運営

に功績のあった方々に、参与

・賛助会員になっていただく

運動をしています。一口、団

体五万円、個人一万円以上。

申込み 協会事務局迄

新会員紹介

水原山の会(会員二〇名)

北蒲原郡安田町福永四〇一

松村守 方

電話〇二五〇六八一―三七六四

代表者 松村 守

事務局より

あ と が き

新年度より分担金の変更

になりました事は前号で御案内

の通りです。新しい金額で新

年度事業計画を協会としては

進めているわけですが、納入

期限迄に分担金を納入されな

い団体が数団体あり、事務局

としましては困っております。

もう一度各団体分担金納入の

有無確認して下さい。なお銀

行振込みの際、加盟団体名を

正確に記入して下さい。

現金

長岡市学校町一―二二二

十三 室賀輝男方

新潟県山岳協会宛

銀行振込み

第四銀行長岡東支店

新潟県山岳協会口座

普通121262

今号の久保田全氏による紹

介にもあるように、県下岳人

にとって良き案内書となり、

山行に一層の厚みをもたせて

くれる本が藤島玄著で発行さ

れました。専門書が少ない分

野での一光で、著者の努力に

敬意を表したいと思います。

第二十二回自然公園大会が

無事終了し、報告書を読みな

がら「ホー」としながら、ま

た複雑な気持が過ぎりました。

自然への関心度の高さと、各

団体の大会への取り組みが熱

心であられました、参加申込

み数二百名を越える多きにな

り、全員の参加を県当局へ打

診し交渉を重ねてきましたが、

人数制限の壁は厚く、何人か

の方々から御辞退を願った経

緯が思いおこされました。参

加できなかった方、また自然

に関心をおもちの方、次の機会

に山でお逢いしたいと思います。